

社会でたくましく生きる個が育つ

～学んだことを積み上げる経験を通して～

矢出 大介

6年生の社会科では歴史の学習が中心になる。国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにすることが目標である。この目標を達成するにあたって2つの課題に焦点を当てて研究を進めている。1点目は、どのようにすれば、「ひと・もの・こと」との出会いを大切にしたい社会科の授業を進めていくことができるのか。もう1点は、どうすれば、間接的資料を活用して、子どもが本気で課題に向かっていくことができるのか。この2点について研究を進めた。

キーワード： たくましさ 体験的な学び 地域教材 知識の構造図

1. 社会でたくましく生きる個

社会でたくましく生きる個とは、様々な場面において、主体的に乗り越える力をもった個だと考える。そのようなたくましく生きる個を育てるには、子どものところに多くの体験的な学びをし、様々な考えをもった魅力的なひとに出会い、感動して学ぶことが重要である。このような複合的な学びは、長期的な記憶として子どもの記憶に残り、これからの自己の生き方をより良い方向に導くと考えられる。また、目標に向かって自ら追究し、仲間と考えを深め合う経験も必要である。学んだことを表現活動として組み入れて振り返ることも知識を再構成し、次の活動につなげてくれる。

1. 1 「ひと・もの・こと」との出会い

子どもが、「ひと・もの・こと」と出会い、学ぶ意欲を高めてくれる教材の1つに地域教材がある。子どもたちが生活している地域を教材にすることは、子どもたちの知りたい・もっと学びたいという追究する意欲を高めてくれる。また、子どもたちが自分たちの住む地域の様子に関心をもち、そこに暮らしこだわりをもって働く人々と直接的なかかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現していく。そして、課題を追究し続ける主体的な活動が、地域について真剣に考え大切に思う心につながっていくと考える。こうした地域教材の魅力を以下の3点で捉えた。

- 1 子どもたちにとって身近であり、親近感をもち、その中で生活することのよさを感じることができる。それにより地域を大切にしたい気持ちが高まり、地域の発展を願う気持ちを培うことができる。
- 2 直接体験を伴った見学や調査をすることが容易であり、様々な魅力的な人々と出会い、いきた資料や情報を収集するなど、インターネットや本だけでなく多様性をもって地域教材を活用することが

できる。

- 3 自分の生活にとって切実感があり、体験を生かして考えて判断することができる。

これら3点が、地域教材の魅力である。

1. 2. 魅力あるひととの出会い

これからの時代を生きぬくためには、来るべき社会がどう変わろうとも、どんな困難に直面しても、主体的に立ち向かい、乗り越える力を身に付けること必要があると考えられる。そのためには、魅力あるひとに出会うことが重要な要素である。魅力あるひとに出会うことで、「自分もこうなりたい。」「自分ももっとがんばりたい。」「大人になったこんなことをしてみたい。」など、社会に出ていくことに希望をもつことができる。そして、出会いをより効果的にするには、指導者になってもらえるようなひととの最初の出会いが、とても重要である。教師が「このひとと会いましょう。」と子どもに言うのではなく、何か問題が起こったり、子どもたちだけでは解決が難しい壁にぶち当たったりした時が、魅力的なひとと出会うチャンスになる。疑問や問題を解決するためには、どうすればいいのかを投げかけ、子どもたちの中から、「このひとに聞きたい。」「このようにひとに聞きたい。」と声が上がってきてから、そのひとに出会わせることが大切である。自分たちが望んで来てもらったひとなので、学ぶ意欲が高まる。

また、いきなり出会うのではなく、事前にみんなでのようなひと（年齢・性別・性格・見た目など）なのか話し合ったり、想像して絵に描いたりすることで、会うことが待ち遠しくなる。そして、出会った時の、印象も強く心に残る。初対面の状況でも、子どもたちなりに何か思いをもって接することができる。ひととの出会いを楽しみにし、その出会いをきっかけに視野・価値観を広げ、自己の生き方を変えることもできる。そして、その魅力的なひとが地域にいることがき

っかけになって、地域を大切に作る気持ちも高まる。

2. 聖武天皇と奈良の大仏

2.1 地域の教材を取り入れた展開

聖武天皇と奈良の大仏の学習をする時に、実際に奈良の大仏を見ることで、なぜこのような大きな大仏を建てたのだろうかという疑問をもって学習に向かうことができる。また、地域にいる仏像や歴史に詳しい人に出会うことで大仏について身近に感じることができる。今回、歴史博物館の学芸員さんと出会い、奈良時代の生活や仏像に込められた人々の願いについて聞くことができた。子どもたちにとって、奈良時代に造営された大仏は遠い存在であり、なぜそのようなものを建てたのかということが疑問になっていた。しかし、学芸員さんに話を聞く中で、仏像は、人々の心が思いやりの精神でつながることを願って作られていることを感じていった。奈良の大仏にもそのような思いが込められていると感じ、少しずつ身近に感じることができていった。

学習を進めるうちに、今の時代にも奈良の大仏に込められた思いを多くの人伝えていること、未来につなげていることの素晴らしさを感じる子もいた。

2.2 資料の読み取り

地域の教材を活用することで、子どもが学習課題に向かって学びを深めていくことができる。その学びをさらに深めるためには、資料を読み取る力が不可欠だと感じた。小学校学習指導要領に書かれているように、各学年で資料を読み取る力を積み上げていかなければいけない。そのためには、教師がしっかりと教材研究をし、子どもの意欲を高め、読み取る力がつくような資料を準備しておく必要がある。資料を読み取ることができることで、歴史のように直接体験ができない場合においても学びを深めることができる。

学年	身に付ける資料を読み取る力
3年生	地図やスーパーのチラシなどの具体的資料を読み取る力
4年生	地図や地球儀や統計などの各種の基礎的資料を読み取る力
5年生	地図や年表などの各種の基礎的な資料を読み取る力
6年生	地図や年表などの各種の基礎的な資料を読み取る力

表1 各学年において身に付ける資料を読み取る力

2.2.2 学ぶべき知識の整理

子ども一人一人の問題意識や興味・関心を尊重し、社会科の「確かな学力」をつけるためには、教師が子どもたちになにをいかに指導するのかということを綿密に計画する必要がある。子どもの興味・関心に任せ

ているだけでは、一時の楽しさや面白さを味わうことができても、社会のことを十分に理解し認識した状態には至らない。つまり、社会のことを理解・認識させないまま、社会に送り出すことになる。

そのため、子どもの主体性を尊重する軸と、教師が適切な指導性を発揮するという軸をバランスよく調和させる必要がある。こうした課題を解決するためには、知識の構造図を作成し、それぞれの知識を問題解決的な学習過程に位置づけて指導することによって解決できると考える。

知識の構造図は「なにを」を指導するのかを整理したものであり、指導計画はその「なにを」を「いかに」指導するのかを示したものである。

知識の構造図

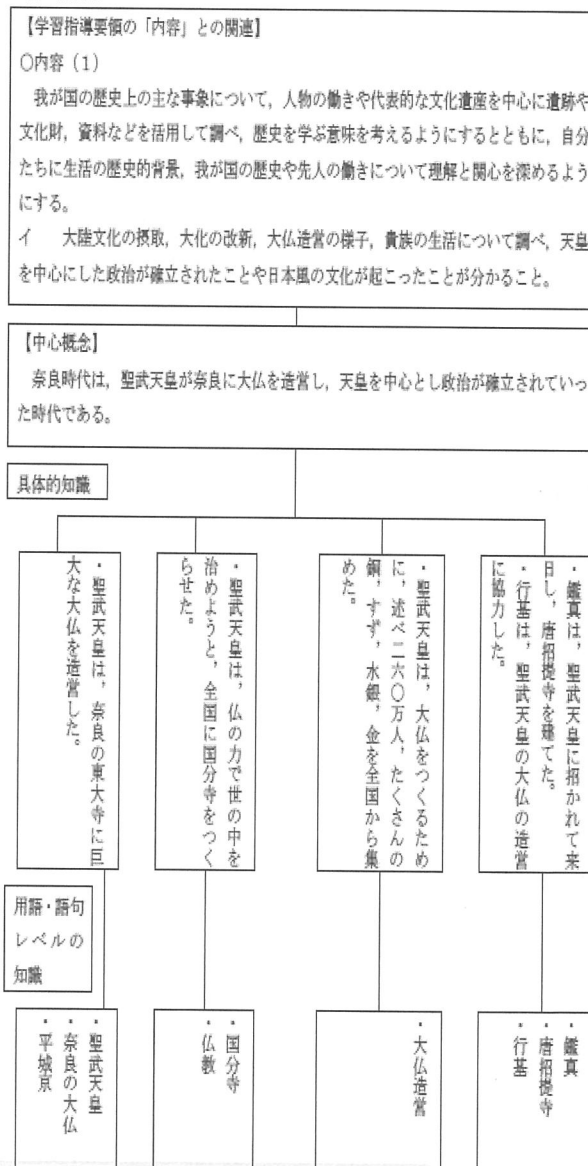


表2 知識の構造図の例 「聖武天皇と奈良の大仏」

上記のような知識の構造図を作成することで、子どもの学んだことが積み上がって行くと考えられる。単元に

において最終的に獲得したい知識を中心概念とし、それを説明するために必要な具体的知識を獲得させていく。この時に、具体的知識も左から順番に積み上がっていくように計画することで学びが深まっていく。また、押さえるべき用語・語句レベルの知識を共有しておくことで話し合いを進めやすい。

知識の構造図を作成して、計画的に進めていくときに、課題解決学習を意識することも大切である。一時間の授業ごとにジャンプのある課題が必要である。

2. 学び方の研究

2. 1 ひとり学習と全体学習の充実

社会科において、「学びをデザインする子ども」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていく姿である。ひとり学習を進めていく上で、子ども一人一人をしっかりみとり、評価することが大切になってくる。そして、その評価やみとりに基づいて、その個をどのように育てたらいいのかという明確な視点をもって、個に応じた指導をすることができる。それにより、主体的にひとり学習をするための支援をしていくことが重要である。個をしっかり理解することで、個が育っていく。全体学習において、調べ学習を通して蓄積してきた自分の考えを発信することで、考えを明確にすることができる。そして、友だちと話し合いを進める中で、自分の考えを見直したり、深化させたり、発展させたりしながら、お互いの共通点や相違点を探ることができる。これにより、クラスみんなで課題を共有することができる。つまり、ひとり学習を充実することで、全体学習の場で自分の考えを修正したり、深化させたり、発展させたりすることができる。それにより、ひとり学習の必然性が明確になり、意欲的に調べ学習ができると考えている。また、自ら意欲的に課題を追究し、自分で新たな問題を発見し、問題解決の過程で友だちと学び合うこと自分を見つめ直し、自己の生き方をよりよいものになるようにつなげていける。

2・2 知識を再構成する

子どもが知識を再構成するとは、これまでの一次的な知識の構成をよりよく修正する営みである。

そのきっかけは、学級やグループで話し合い・吟味することによって生まれることが多い。新たな資料で調べなおすことによって新しい知識を習得した結果、修正することもある。教師の助言や友だちの発言、または自らの振り返りがきっかけとなることもある。

子どもたちが話し合う中で知識を再構成するためには3つのポイントがあるように感じた。

- ① 課題に向かってみんなで話し合う場合に、これまで調べてわかったこと（具体的知識）をもとに自

分の考えを伝え合うこと。

- ② 子どもたち一人一人が考えたことを発言するだけでなく、文字や図表などで書くこと。
- ③ 課題に向かって学級全体で話し合う時には、一人一人が導き出した課題に対する考えを伝え、みんなで吟味し合いながら、より良い考えを導き出すこと。

3. 授業実践

江戸時代の終わり

「なぜ江戸幕府は鎖国をしたのかについて話し合っている場面

あき：江戸幕府は、外国から攻められるのを恐れたのだと思います。

かこ：あきちゃんに付け足して、江戸幕府は外国から攻められるのを恐れたので、外国からの船を受け入れなかったのだと思います。それに、日本人が他の国のことを知られると幕府が人々を管理しにくくなるので、外国に行くことも禁止したのだと思います。

しん：資料集を見て下さい。長崎の出島の様子を見ると長崎奉行所が出島を管理しているように見えます。だから、かこちゃんが言ったように日本人を管理しやすくするために、余計な情報を知られないようにしたのだと思います。

たく：ちょっと待って下さい。管理するためなら外国との貿易をしないほうがいいんじゃないですか。なぜオランダと中国とは貿易をしたのですか。

しん：もう一度資料集を見て下さい。このページに鎖国までの歩みの資料がありますよね。ここを見ると、スペイン船の来航を禁止した直後にキリスト教を取り締まる絵ぶみを行い、ポルトガル船の来航の禁止を少し前に島原・天草一揆が起こっています。だからキリスト教と関係しているんじゃないかと思っています。

のぶ：僕もキリスト教が関係していると思います。だってキリスト教は平等を大切にしていますよね。その考えは江戸幕府の身分制度に対して不満をもつ人がでそうだったからだと思います。だから島原・天草一揆も起こったんだと思います。

たく：じゃあなんでオランダと中国とは貿易をしたんですか。

かこ：調べたんだけど、オランダはキリスト教だったんだけど、キリスト教を広めないという約束で貿易を求めたそうだよ。そして、中国はもちろんキリスト教を広めないし。

たく：わかった。けど、なんで幕府が日本人を管理することが難しくなるかもしれない外国との貿易をわざわざしたのかわからない。

なほ：幕府は外国の文化や情報を知りたかったんじゃないかな。

教師：じゃあ、この鎖国の中の4つの窓口という資料

を見てたく君の疑問について考えて下さい。

4. 単元の考察

多くの疑問を中心に資料を活用しながら話し合いが進んでいった。実際に体験したことではないが、資料を読み取ることで、多面的に課題に迫ることができた。

資料を読み取る力を積み上げていくことで、話し合いが深まっていくことを感じるようになった。しかし、単元のつながりとして、教師が鎖国とそれ以降の江戸幕府の文化や学問の学習で学ぶべきことを整理できていなかった。そのため、資料を通して話し合いは深まっているように感じるが、鎖国について学んだことが次の江戸幕府の文化や学問で活かすような展開になっていかなかったようにも感じた。

知識の構造図を作成し、単元での知識のつながりを考えるだけでなく、単元前後の知識のつながりも考えることの重要性を感じた。

5. 成果と課題

「歴史は覚えることばかりで、楽しくないのかと思っていました。けれど、歴史を知ることで当時の人々の思いや願いを感じることができたので楽しくなってきました。歴史を勉強したことで今の生活の良いところ悪いところを考えるようになりました。」

この子どもの感想から、歴史を学ぶのではなく、歴史から何かを学ぶことが大切だと改めて感じた。今の日本があるのは、歴史があるからである。そして、歴史を知ることで自分が日本人であることを意識することもできる。そして、郷土を愛する心が育つと考える。そのためには、間接的資料から当時の様子を考えることも大切であった。そのためには、各学年・各単元・本時においてどのような資料を用意して、どのように学び、どのようなことを学んでいくのかを計画していく必要があると感じた。今回、資料の準備とどのように学ぶのかについては考えていけたが、単元と単元のつながりを考えて、どのようなことを学ぶのかという知識の構造図を作成できていなかったことが大きな課題となった。そして、社会的現象について習得した知識と知識の関係性をつなぐような展開を計画できていなかった。そのために、社会の現象を総合的にとらえることができていな子もいた。「ひと・もの・こと」と出会うことが困難であり、間接的資料で学びを深めていくためには、資料から多面的に考えることができる積み上げと、それぞれの学習で知識を積み上げていくことが必要だと感じた。もっと、多様な知識を階層的に関連付け、構造的に整理しておくべきだった。

また、子どもが歴史の学習において、課題に向かって本気で学ぶために必要なことは、何か資料を見たときに疑問や驚きを大切にすると必要だと感じた。例えば、奈良の大仏の資料を見た時に、大半の子どもは

「すごく大きい。」「立派だ。」という感想をもつ。しかし、必ず何人かの子どもが「なんでこんな大きい大仏を作ったのかな？作る意味があったのだろうか。」という感想をもつ。実は、このような感想を中心にして考えを深めていくことが大切なのではないかと感じた。なぜなら、今の時代として考えた時には、あのような大きな大仏を作ると考えると疑問に思う子がほとんどである。しかし、奈良時代には、疑問に思える大仏を作った。そのことを考えていくことで、同時に人々の様子を知り、思いや願いにせまることができる。その時に、今の時代では疑問に思えることをなぜその時代でしていたのかと考えることがとても大切である。このような子どもの疑問や驚きを出発にすることで課題に対して本気で学んでいくことができた。

歴史の学習には、「ひと・もの・こと」との出合いが難しい単元もある。しかし、できるならこの出合いを大切にして、単元展開をしていくべきだと感じた。そのためには、まず地域に目を向けて地域教材の開発をすべきだと考える。単元を中心に地域教材を位置づけなくても、単元のどこかで地域と関わらせることが大切だと感じた。なぜなら、社会科は社会を学ぶ教科である。子どもにとって遠くに感じていることを少しでも近づけるべきである。また、社会でたくましく生きる個に育つためには、できるだけ複合的な学びを経験していくことが必要だと感じた。様々な場面において、主体的に乗り越える力をもった個だと考える。

課題としては、知識の構造図を作成して、知識を関連付け、構造的に整理しておけばもっと子どもたちの考えが共有化され、学びが深まるのではないかと考える。

地域教材の開発が大切なのは言うまでもない。しかし、間接的な資料のみでしか学べない場合においても、子どもがいきいきと学ぶためには、基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていくことが重要であると感じた。地域教材を活かしつつ、間接的な資料からも学びを積み上げるためには、教師が目標をたて、内容と方法をいかにして一体化させていくべきなのかもっと明確にして授業実践をしていきたい。

参考文献

- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領」
北 俊夫（2011）社会科学力をつくる“知識の構造化”－“何が本質か”が見えてくる教材研究のヒント－
明治図書
（2010）和歌山大学教育学部附属小学校記要 No. 33
（2011）和歌山大学教育学部附属小学校記要 No. 34
（2012）和歌山大学教育学部附属小学校記要 No. 35
（2013）和歌山大学教育学部附属小学校記要 No. 36